

鶴彬墓碑建立式典 第 20 回鶴彬碑前祭 鶴彬没後 80 周年記念講演会

……ドイツの鶴彬……
ドイツの抵抗文学
講演 田村光彰先生

この文章は、2018 年 9 月「和川柳社」会報に寺内徹乗さんが寄稿されたものです。

今年（2018 年）の鶴彬の命日（9/14）には高松の浄専寺で、鶴彬墓碑建立式があり、参列者とマスコミ合わせて約五〇人ほどが、浄専寺前の歩道に所狭しと集まっていた。

鶴彬のお墓は盛岡にあります。墓を守ってきた盛岡の喜多さん（鶴彬の兄の息子の妻）が高齢になり、喜多さんと交流のあった城戸さんも高齢になったこともあり、顕彰会の幹事会で、盛岡の墓から分骨してもらい、高松に二つ目の墓を立てようという話になりました。そして今年七月、顕彰会の代表者が盛岡に出向き、分骨式を行い、八〇年ぶりに故郷高松に帰えり、新しくできた鶴彬墓碑の前で供養が行われました。鶴彬を顕彰する会の前会長は、鶴彬の遺骨に「お帰りなさい」と声をかけました。

墓碑（第 2 のお墓）は浄専寺の境内に入っですぐの所、「胎内の動き知るころ骨がつき」の句碑の横にあります。機会があればお参りして下さい。

田村先生の講演「ドイツの鶴彬」

続いて、第 20 回、鶴彬碑前祭（画像）。最後は、鶴彬没後八〇周年記念の講演として、田村光

彰先生（元北陸大学教授「ドイツ文学・ドイツ近現代史・日独の戦後補償が専門」に「ドイツの鶴彬（ドイツの抵抗文学）」というテーマで話をしていただきました。田村先生と私は、今年の鶴彬のシンポジウムと尹奉吉（ユン・ボンギル）の国際学会などで知り合いになりました。

毎年の鶴彬忌の碑前祭では、ドキュメント映画を見ることが多いのですが、今年は鶴彬没後八〇年ということもあり、田村先生に「ドイツの鶴彬」というタイトルで講演をお願い



【講師 / 田村先生紹介】
1946 年仙台市生まれ。いしかわ教育総合研究所所長。元北陸大学教員。日独の戦争・戦後反省、欧州移民・難民に関心。『大東亜聖戦大碑』撤去の会 事務局長。著書：『統一ドイツの苦悩』『ドイツ二つの過去』など。

したところ、快く引き受けて下さいました。

「ドイツの鶴彬」というタイトル

私が「ドイツの鶴彬」という風変わりなタイトルにしたのは、ドイツにも鶴彬のようなレジスタンス文学があったに違いないという私の仮説によるものです。そこで私が田村先生に「ドイツでも、鶴彬が日本の軍国主義に抵抗したように、ナチス政権に抵抗した詩人がいたのでしょうか？」とお聞きしました。すると田村先生はあっさりと「日本より、たくさんいましたよ」という答えが返ってきました。これを教えてもらおうべく私は「ドイツの鶴彬」という講演の企画をしました。広告では「ドイツの鶴彬」にしましたが、当日の

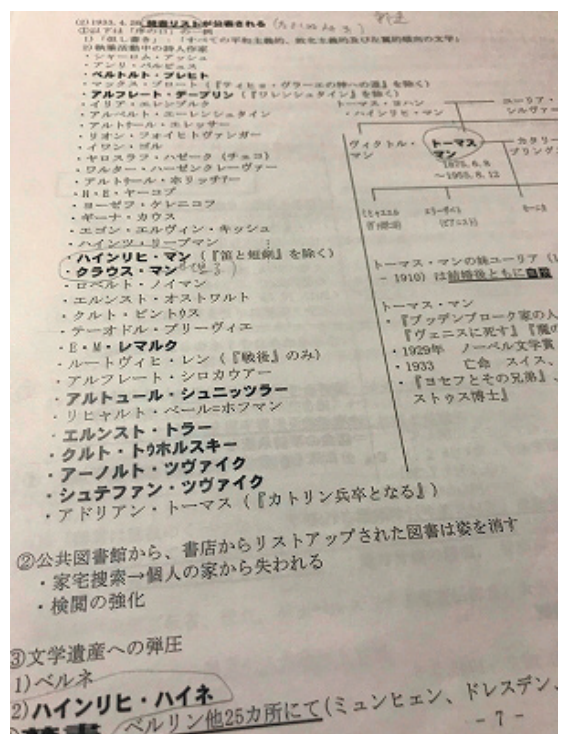
資料には「ドイツの抵抗文学」にしました。

講演の2日前、田村先生から一九ページに及ぶ講演資料が届き、その量にも驚いたのですが、中身もびっくりさせられました。その晩、急いで妻と私で表紙のデザインを考え、前日（準夜前）に妻に手伝ってもらいコンビニで四〇部印刷し、準夜明けの当日の朝、資料を製本しました。四〇部は多いかと思いましたが、人が集まりまして、ギリギリセーフでした。

田村先生の講演では、ドイツの近現代史の基礎から始まりました。当時のドイツは、もともと民主的なワイマル憲法という先進的な憲法があり、進んだ民主主義国家でしたが、ヒトラーという独裁者の政権を生み出しました。麻生太郎のいう「ナチスの手口から学べ」というのは、どういうことなのか。現代の日本に照らし合わせた解説もありました。

レジスタンス作家がたくさんいた

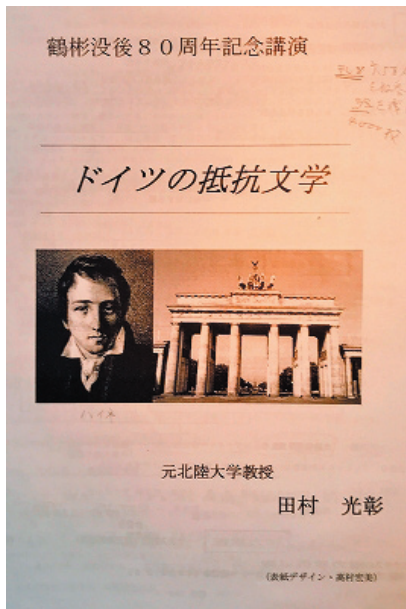
田村先生は、ナチス政権に抗ったたくさんのドイツのレジスタンス作家の名前を挙げました（写真）。一〇〇人以上はいます。中には



資料には100人を越えるレジスタンス作家のリストがビッシリ紹介されていた。

ヒトラーを批判し、強制収容所に送られて、ノーベル平和賞を受賞しながら授賞式に行けず、獄死した人（オシエツキー）もいます。

私にとって、名前も聞いたことのない人ばかりです。抵抗文学の作家たちは、ネットワークでつながっていたそうです。日本の抵抗文学と言えば、鶴彬以外で有名なものは、作家・小林多喜二、詩人・中野重治、詩人・森山啓などいますが、一〇〇人も挙がりません。日本とドイツの国民性なのかもしれませんが、ドイツ人の反骨心とパワーは、日本人の比に



田村先生の本文19頁にもなる詳細な資料。

はならないと私は思いました。

ハインリッヒ・ハイネ

ドイツの国民的詩人にハインリッヒ・ハイネ (1797 ~ 1856) がいます。ナチス政権下で抵抗文学を展開し迫害されていた詩人や作家たちも、ハイネを尊敬していたようです。

ナチス政権下の多くの詩人や作家は、亡命先で発表されたか、強制収容所の中で密かに

書かれ、密かに持ち出され、ドイツ国外で発表されたものだそうです。

田村先生は、「ドイツの鶴彬を一人挙げるなら、ハイネです」と語りました。

「本を焼く者は、やがて人間を焼く」

ハイネなら、私も名前くらいは知っていました。ゲーテやシラーと並ぶドイツロマン派の詩人で、ラブロマンスを詠んだ人だと、私

は勝手にイメージしていましたが、これは偏見だと私は学びました。ハイネは、王権に抗った風刺詩人で、監視・弾圧され亡命生活を強いられた反骨の詩人でした。ハイネが亡くなつて約八〇年後にヒトラーは独裁者になり、ヒトラーは真つ先にハイネを焚書にしました。ハイネは「本を焼く者は、やがて人間を焼くようになる」と語りましたが、予言どおり、ヒトラーは何百万人という人間を殺し、焼きました。

ハイネを熟読し理解していた鶴彬

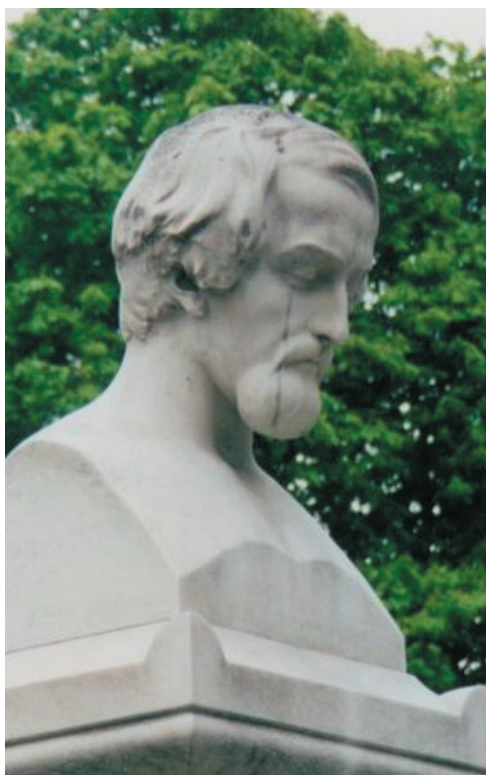
そのハイネを鶴彬は熟読し、その神髄を理解し、高く評価していました。田村先生は「鶴彬全集」を精読し、鶴彬がハイネを「風刺的リアリズム」と高く評していたことを見逃しませんでした。これはドイツ文学に疎い私は、完全に見落としていた部分です。要するにハイネは、ヒトラーに抵抗したドイツの詩人・作家だけではなく、鶴彬本人にも影響を与えていたことになります。これは、全国の鶴彬研究者にとつても新発見だと思います。

ヒトラーに協力したハイデッガー

田村先生は、ハイデッガーについても、紹



↑ ニューヨーク、ブロンクス区ハイネの記念碑



← モンマルトルの墓地にあるハイネの胸像

介されました。もともと田村先生はハイデッガーの研究者だったそうです。ハイデッガーは、ヒトラーに抵抗した文学とは対極にあります。

ハイデッガーは、根っからのユダヤ人差別主義者で、ヒトラー崇拜者でした。これは彼の書いた手紙から、はっきり分かっている事実だそうです。ハイデッガーは、ヒトラーに協力したことは有名な話ですが、自分の講義を受けていたユダヤ人学生がいなくなったことを喜ぶ内容の手紙を弟に送っています。ハイデッガーは、ユダヤ人学生がどんな苦しい目にあつたかは、想像できない人でした。しかも、ハイデッガーは戦後、反省をするどころか、「戦後はナチ時代よりも、ひどい」といい、「ハイネ通り」と名付けられた道の名にも、不快感を示していました。極めつけは、「自分もヒトラーの犠牲者だ」とか言っていたそうです。

ハイデッガーと対照的なのが、ドイツのヴァイゼッガー大統領だと、田村先生は語りました。ドイツ国民も加害者だったことを認め、「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となる」と演説をしたことは、有名です。

× × ×

田村先生の講演を、たった四〇人が聞いて終らせるのではなく、もっと多くの人に知ってもらいたいのです。今年中には、鶴彬を顕彰する会の「はばたき」に田村先生の講演録をまとめたと思います。(了)

(注…講演録は未完です。)

【編集子より】かほく市とドイツ・メスキルヒ市は1985年姉妹都市を結んでいる。メスキルヒ市はハイデッガー（哲学者、ナチス党員でヒトラー崇拜者）の生地。かほく市は西田幾多郎（八紘一字を理論化し戦争に深く関わった）の生地。この二人の哲学者は大変似ている。二つの市に似た哲学者がいて姉妹関係を結んだのは理解できるが、戦時下の哲学者の果たした役割りの理解で両都市が同じものか知りたいものである。

将来、鶴彬が世界的に認知され、ハイネの生誕地・デュッセルドルフ市とかほく市が姉妹都市になればいいですね。鶴彬を顕彰する活動の新しい課題かもしれません。

.....

※なお、この資料を作成した経緯を簡単に紹介しておきます。

この文章は、2018年9月の「和川柳社」

会報No.672に寺内徹乗さんが、高松で開催された、鶴彬没後80年を記念した一連の行事、特にその中で企画された「講演・ドイツの抵抗文学」講師・田村光彰先生」の内容を紹介してもらいました。寺内さんはその詳細を講演録としてまとめようとしておられました。しかし、当日参加の方にはよくわかるのですが、講師独特の語りで、膨大な資料の中を何度も往復し、聞く方も大変、文章化するのはもつと大変。講演録としてまとめるのは、非常に困難な作業だったと思います。寺内さんも格闘されたと思いますが、結局途中で中断。現在に至っています。

講演内容は貴重なもので、本文中で寺内さんも指摘されているように、「ハイネは、ヒトラーに抵抗したドイツの詩人・作家だけではなく、鶴彬本人にも影響を与えていたこととなります。これは、全国の鶴彬研究者にとっても新発見だと思います。」ということ、とりあえず、講演録が完成するまでのつなぎとして、「和」に寄稿されたものを転載し、鶴彬研究、ハイネ研究の一助になることを期待して作成しました。

2020年5月（和川柳社「編集者」）